

『劔の巻』 源家相伝二刀譚の主題を読み解く

—— 実在する名刀が背負う武家盛衰のメタファー ——

浅野 歩

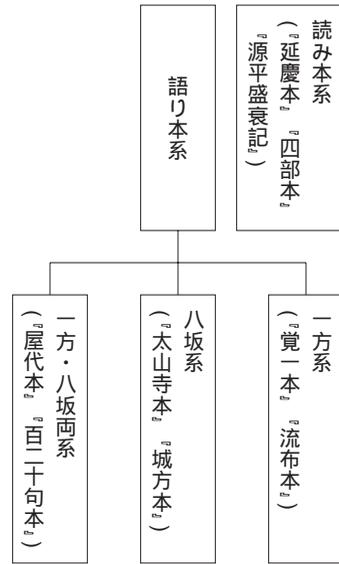
はじめに

『劔の巻』は『平家物語』の諸本において、屋代本・流布本・その他版本の付録として、あるいは百二十句本のように本文中に組み込まれる形で残る。

本論に入るに先立って、『劔の巻』を収録しているところの、『平家物語』に遡り、その諸本について確認しておきたい。『平家物語』の伝本は、まず大きく「読み本系」と「語り本系」に分類される。読み本系には、比較的内容の近い『延慶本』・『長門本』・『源平盛衰記』と、『四部合戦状本』・『南都本』がある。また、語り本系の中には一方系と八坂系

という二つの系統に分岐する。一方系は灌頂巻が特立する灌頂巻型の形をとり、八坂系は灌頂巻が特立していない断絶平家型の形態である。そして前者の一方系には、南北朝時代に覚一という僧侶が自身の語りを書き写させたことで知られる『覚一本』や、江戸時代初期に版本として広く流通した『流布本』などが含まれる。また一方系と八坂系の両方の特徴を持つ諸本には、語り本系の中で最古といわれる『屋代本』や『八坂本』、百二十句本がある。図式すると、図1のようになる。松尾葦江氏によれば、読み本系諸本と語り本系の二大系統は、比較的早期に分岐したと思われる、成立論との関係では、読み本的な本文の方が古態のものであるという見解が現在の平家物語研究の共通認識になりつつある、という¹⁾。

【図1】『平家物語』の系統およびその代表的な諸本
(松尾二〇一五)をもとに作成



様々な伝本の中で、一般的にテキストとして広く用いられているのが『覚一本』である。『剣の巻』はこの『覚一本』を含め多くの諸本で見受けられるが、そのほとんどが神代からの朝廷相伝の宝剣物語のみが語られている。一方、源家重代の太刀を語る『剣の巻』は、諸本のうち『流布本』、『屋代本』、『百二十句本』の三つのみである。ただしこの三つの系統の諸本にも、朝廷伝来の宝剣物語が記されている。すなわち、本稿が考察の対象とする源家重代の太刀に関する物語は、『平家物語』語り本系のみには伝えられていること、またそれ

は南北朝期に『覚一本』が大成するまでには既に、語り本系最古とされる『屋代本』において成立していたこと、以上の二点が確認される。

『流布本』・『屋代本』では本編の別冊として付属する形で残るいわば付録型の形態であり、また『百二十句本』では物語本編の途中に「剣」という章段が取り込まれている本誌型の物語と定義されよう。この二つの形態を比較すると、付記として独立した付録型の『剣の巻』の方が、本誌型よりも詳細かつ叙情的に語られているのが特徴である。

ここで、『剣の巻』諸本に共通して語られる、イザナキ・イザナミの神代から説き起こされる朝廷の宝剣物語とは何を語るものかについて述べておく。この宝剣物語は、本誌型においては「剣」の章段は上・下に括られ、上で神代起源の宝剣、下で源家の太刀が記されるのに対し、付録型『剣の巻』では義経の功績から一度物語が途切れて、時代を遡ってイザナキ・イザナミに始まる宝剣物語を展開する。

『平家物語』自体の内容から離れ、源家の宝刀物語と神代の宝剣物語を語る『剣の巻』は、その成立や後代作品との関連性など様々な視点から研究がなされてきた。高木信氏によ

れば、『平家物語』の「劔巻」は、安徳帝と共に海底に沈んだ宝劔草薙劔の由来を語る物語であると同時に、「宝劔が人間世界に戻らない理由を語る章段でもある」といふ。さらに、「宝劔喪失とともに源頼朝による武家政権が始まるという構想は、『愚管抄』において 宝劔喪失は源氏の台頭により武力の象徴である宝劔が不必要になったからである とする認識と相通じる」とも述べている。²⁾すると、付録型「劔の巻」において、義経の功績から一度物語が途切れてのちに宝劔物語に遡っている点は、物語の展開としていささか落ち着かぬ感が否めないとしても、義経、宝劔とともに「命運の尽きる」という点において相響きあうという認識に発した話の展開として了解されよう。

源家の宝刀物語とは、髭切・膝丸の二振りの太刀が清和源氏嫡流源家に伝わりとともに、劔の靈験が源家に勝利をもたらすという物語である。本稿では、これを『劔の巻』源家相伝二刀譚と称し、以下の叙述においては便宜、多くは『劔の巻』とのみ略記する。そのあらずしは、以下のとおりである。

源満仲は清和天皇から天下の守護となるべきよい劔を求められた。そこで、満仲は武神である八幡神に源氏の武運を

願ひ、筑前国御笠郡（現在の福岡県西部）の上山に住む「異朝より鉄の細工」に、刀制作を命じた。上山の刀匠は二振りの刀を拵え、その二振りのうち、一つは試し斬りで髭ごと斬り落としたことから「髭切」と、もう一つは両膝を薙ぎ切ったことから「膝丸」と名付けられた。二振りは満仲の子である頼光の手に渡り、「髭切」は頼光の従者の渡辺源四郎綱が用いて鬼を切ったことから「鬼丸」と名前を変える。次いで、「膝丸」は同時期に高熱に悩んでいた頼光が用いて、熱病の原因だった土蜘蛛の精霊を切ったことで「蜘蛛切」となる。

その後二振りは頼光の孫である頼綱へ、また、天喜五年（一〇五七）に安倍貞任・宗任兄弟を成敗しようとしたとき、頼光の弟である頼義へと持ち主を変える。為義が源家を相続すると、二振りは為義のもとへ渡り、鬼丸は終夜獅子のように吠えたことから「獅子ノ子」に、蜘蛛切は蛇のように鳴いたことから「吠丸」へと名前を変える。

吠丸は為義の娘婿（藤原実方の子孫）へ引き出物として渡されたのち、熊野権現に納められ、しばらく戦場を離れることとなる。

為義は二振一具として共にあつた獅子の子と吠丸が離れ

てしまったことを気掛かりに思い、為義の手元に残った獅子ノ子を写した太刀「小鳥」を拵えたが、小鳥は獅子ノ子よりも二分ほど長かった。あるときこの二振りを障子に立て掛けて置いていたところ、刀が倒れ合つてぶつかり、小鳥の茎が切れてしまい、それから獅子ノ子は「友切」と呼ばれるようになる。

「友切」の名になつてからは、義朝は敗走続きとなつてしまつた。都落ちを嘆いた義朝は夢で、友切という名前は味方が滅びるに等しいため、かつての名に戻せばこの先未来は安泰だろうという八幡神からのお告げを受け、友切を「髭切」の名前に戻した。

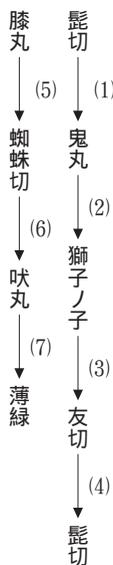
そして、髭切は鎧と一緒にわずか十二歳の頼朝に譲られた。頼朝は髭切を佩刀して平治の乱に臨んだが、平氏側の優勢を見た頼朝は剣を平家に取られまいと熱田神宮に一時預けた。その後治承四年（一一八〇）に、再び髭切は頼朝のもとへと戻る。

平治の乱のときはまだ一歳だった牛若は元服後に義経と名乗り、木曾義仲を誅戮する際に教真別当の子息すなわち田辺の湛増から吠丸が贈られる。春の熊野の山の景色にちなん

で「薄緑」と名付けた義経は、鎌倉へ下るときに、薄緑を箱根権現に納めた。建久四年（一一九三）五月、曾我兄弟の仇討ちに先立ち箱根の別当行実の手から薄緑が曾我五郎に渡された。この薄緑は、兄弟による仇討ちののち鎌倉へ移つて髭切のもとへと渡る。この二振り一具が揃つたのは、様々な波乱を迎えたものの源家の重宝であるということを実感たらしめるものなのである。⁽³⁾

以上に語られる、髭切と膝丸に付けられた号の変遷は図2のとおりである。

【図2】刀の逸話と号の変遷



- (1) 渡辺綱が鬼を切る
- (2) 夜通し獅子のような声で吠える
- (3) 獅子ノ子の写しの茎を切る
- (4) 夢で刀の名を戻すようにお告げを受ける
- (5) 源頼光が土蜘蛛を切る
- (6) 夜通し蛇のような声で鳴く
- (7) 春の熊野の山が薄い緑色であることから（屋代本や読み本系など付録型の諸本に記述。百二十句本には明記されず。）

第一章 髭切・膝丸をめぐる問題の所在

『劍の巻』中に登場する刀の名称が数々の刀劍伝書に名刀として記されていることから、渡瀬淳子氏はその成立を南北朝期以降であるとし、これがこんにちの通説を形成している。⁴

本稿は、髭切と膝丸が逸話と共に移り変わる名称について、それぞれの名称のモデルになったと考えられる實在の名刀を措定する。そして、その名刀所持者と源氏との歴史的関係を考察することによって、煩瑣を思われるほどにめまぐるしく名称を変えていく刀劍説話である『劍の巻』が、はたして何を意図した物語であるのかについて明らかにしようとする、一つの試みである。

本稿のこうした試みを成立させる根拠となるのは、『劍の巻』後半に記され、髭切の呼称が戻される契機となった源義朝が見た夢のお告げである。以下は、その場面について流布本と百二十句本の本文である。

『平家物語』流布本「劍の巻」⁵

我汝を棄つるにあらず。持つ所の友切といふ劍は、満仲

が時俄に与へし劍なり。髭切、膝丸とて、始のままにてあらば、劍の用も失すまじきを、次第に名をつけ替るに依りて、劍の精も弱きなり。故さら友切といふ名を附られて、敵をば随へずして、友切となりたるなり。保元に為義が斬られ、子供皆滅されしも、友切といふ名の故なり。今般軍に負けしも、友切といふ劍の名の科なれば、全く我を恨むべからず。昔の名に反したらば、未はあるべしと、分明に御示現ありければ、(後略)

『平家物語』百二十句本 第一百八句 『劍の巻』下⁶

「われ放つにあらず。劍の威劣るにあらず。つねに名をあらためけることは、劍の威かろんずればなり。ことさら『友切』の名詮自性は、味方滅ぶるにあひ似たり。なほも劍の名を昔にかへさば、未はたのもしからん」とて、夢ははてにけり。

傍線部よりすなわち、刀の名称を度々変えたことにより劍の靈験が弱まってしまったというのが、お告げの主旨であるといえよう。

渡瀬氏は、『劍の巻』では同書成立時点で実在した名刀を

も源氏重代の太刀の名として物語に組み込んでいることから、『剣の巻』には源氏を称賛する姿勢があるという見解を述べている（渡瀬二〇〇二）。

しかし、『剣の巻』はその最終場面において源家重代の髭切が名称を次々と「付け替る」ことによって、「剣の精」を弱めていったのだと、夢のお告げに語らせている。夢のお告げは、ことさら友切という名が源家衰退のゆえんとなったと強く非難するが、「髭切・膝丸のままであったならば剣の用も失われなかったものを」とも述べている点よりすれば、友切のみならず、移り変わる友切以前の名称自体もまたよくないものだと示しているとは考えられないだろうか。論点

一
ところで、この夢のお告げで注目すべき点は、呼び名が戻された記述が本文中に見られるのは、あくまで髭切に限られている点である。膝丸は義経が薄緑という名称に変更してからは、百二十句本においては頼朝のもとで髭切と揃うまで、また流布本においては義経が頼朝との仲が戻ることを祈って奉納するまでは、薄緑の名のまま物語が進められるのである。『剣の巻』において、膝丸が薄緑から名称が戻されなかった

のは何を意図しているのかについても、先の論点一に關係付けて考察する。論点二

第二章 髭切の別称について

本章では、名称や逸話などが似ているという視点から、髭切・膝丸が名を変えていくそれらの名称のモデルになったと思われる実在の刀を措定し、その所持者や伝わる逸話などの、変遷する名称との共通点を明らかにしていきたい。

第一節 鬼丸と鬼丸国綱

まず、図2の(1)の逸話で変わった「鬼丸」という名称について考えていきたい。鬼丸という刀でまず思い浮かぶのは、同名で天下五剣の一振りの名刀鬼丸国綱だろ⁸⁾。鬼丸国綱については『太平記』に記されている。

『太平記』「鬼丸鬼切の事」

時政これを見て、この間夜々夢に来て見えつる鬼形の者は、さもこれに似たる物かなと、面影ある様にて守り居たるところに、抜きて立てたる太刀俄に倒れ懸かりて、

この火鉢の足なる鬼の首を懸けず切つて落しける。誠にこの鬼や犯しけん、時政急に心地直りて、その後よりは鬼形の物夢にも曾て見えざりけり。さてこそこの太刀を鬼丸と名付けて、高時の代に至るまで、平氏嫡流に伝へて、身を放たず守りと成りにけれ。

『太平記』右の段において鬼丸は髭切由来の鬼切とは区別され、鬼丸としての独立した物語が書かれている。『劔の巻』における渡辺綱が宇治の橋姫の鬼女を切ったことからという呼称の由来も、頼光が老婆に化けた鬼の首を落したという鬼丸国綱の由来と共通するため、髭切が鬼丸と名付けられる逸話は、鬼丸国綱の話を意識して伝えられていったのは明らかだろう。加えて傍線部より、鬼丸国綱は平氏の嫡流に伝えられた重代の太刀であることが分かる。前述したように、『劔の巻』全体に渡瀬氏の源氏を称揚する姿勢が見られるのは渡瀬氏の指摘するとおりではあるが、敵対すべき平家の太刀と同じ名称が源家の刀に使用されているのは、いささか不可解に思える。

第二節 獅子ノ子と獅子王

図2の②で変わった「獅子ノ子」では、名称が似ていて源氏の宝刀として有名な「獅子王」（後述のとおり典拠の表記は「師子王」と表記）という刀がある。その所持者は鶴退治伝説で有名な源頼政で、鶴を撃退した手柄として朝廷から下賜されたというこの逸話については『平家物語』に記されている。

『平家物語』覚一本 巻第四「ぬえ」¹⁰

日ごろ人の申すにたがはず、御惱の剋限に及んで、東三条の森の方より、黒雲一村たち来ッて、御殿の上になびいたり。頼政キツとみあげたれば、雲のなかにあやしき物の姿あり。(中略)其時上下手々に火をともいて、これを御覧じみ給ふに、頭は猿、むくろは狸、尾は蛇、手足は虎の姿なり。なく声鶴にぞ似たりける。おそろしなどもおろかなり。主上御感のあまりに、師子王といふ御劔をくだされけり。

まず、獅子ノ子の名称は獅子王と非常に似ているのはいうまでもない。さらに、夜という時間帯と鳴き声という特徴にも共通性を感じる。鶴については、「鶴子鳥」や「鶴鳥の」

という枕詞がある。鶉の悲しげに聞こえる鳴き声に起源して、これらの枕詞は「うらなく(うら嘆く=忍び泣く)」「や」「片恋」などにかかる。人を慕う感情をこめる表現として用いられる鶉は、本稿第四章で考察するところの、干将が制作した二口の剣の話に通ずる。『平家物語』においては、夜に鳴く鶉の退治が獅子王を導いており、獅子王自身が鳴いたとは記されていない。しかし、獅子ノ子が獅子の如くに夜に吠えたという『剣の巻』の物語が形成されるにあたって、鶉鳥の如く夜に物悲しく鳴く怨霊「鶉」を払拭する獅子の吠え声のイメージが、獅子王に重ねられていたとみることは可能である。

次に、獅子王を佩刀した源頼政(摂津源氏)について考えていきたい。頼政は、源氏という氏族にとらわれることなく状況を鑑みた行動から、しばしば渡世がなる宮廷武士として評価される。その行動がうかがえる例として、保元の乱ではほとんどの源氏一族が崇徳上皇側に味方したのに対して、勝者の後白河天皇方に属したという史実がある。しかし、世渡りに長けた頼政をよく思っていなかった人物がいる。それは、源義朝の長子の源義平である。『平治物語』「六波羅合戦の事」では、頼政と六条河原で対面する義平が、源氏の姓でありな

がら平家側につく頼政を非難している。

『平治物語 中』六波羅合戦の事¹²⁾

源平、河を隔てて、暫し支へたり。義朝申しけるは、「いかに、兵庫頭(=源頼政)。名をば源兵庫頭と呼ばれながら、言つ効なく、など伊勢平氏には付くぞ。御辺が一心に因りて、当家の弓箭に疵付きぬる事こそ口惜しけれ」と、高らかに申しければ、兵庫頭頼政は、「累代弓箭の芸を失はじと、十善の君に付き奉る、全く一心にあらず。御辺は日本一の不覚人信頼に同心すること、当家の恥辱なれ」と申せば、義朝、道理肝に当たりけるにや、その後は言葉もなかりけり。

さらに、頼政は平治の乱でも勝利をおさめ、結果として、多くの源氏一族が義朝の処刑により没落する一方で、平清盛に信頼された頼政は源氏の將軍の中で異例なほどの昇進を果たしていった。しかし平治の乱以後、平家が権力を強めるとともに立場を確立していった頼政は、以仁王とともに平氏打倒を企てるという平家を裏切る行為に出る。渡世術に優れた姿勢といえど、河内源氏の頼朝等からして見れば、源氏と平氏いずれの味方がか不明瞭な裏切り者に近い認識を抱いてい

た。頼政は前述六条河原の場以外でも、『平治物語』「義朝六波羅に寄せらるる事」の付記で、源義平に非難される様子が書かれている。以下の傍線部がその箇所である。

『平治物語』中『義朝六波羅に寄せらるる事付けたり信頼落つる事並びに頼政心替りの事』¹³

源兵庫頭頼政は、三百騎ばかりの勢にて、五条河原西の面に控へたり。悪源太（義平）、これを見て、「頼政が振舞こそ心得ぬ。当家、平家、両陣を見はからひて、強からん方へ付かんとするごさんめれ。義平が前にては、さはせさすまじきものを」とて、京極を上りに、五条を東へ歩ませけるを見て、兵庫頭思ひけるは、「出雲守・伊賀守が六波羅へ行かば、会釈せん」と思ふところに、悪源太、十五騎の勢に、旗一流差させて出で来たる。「あはや」と見るところに、悪源太、大音声を揚げて、「まさなき兵庫頭が振舞かな。源家名を知らるる程の者の、二心あるやうはある。義平が目の前をば渡すまじきものを」とて、太刀打ち振り、喚いて駆けけり。東西南北、十文字に、散々にぞ駆けたりける。兵庫頭、三百余騎に駆け立てられて、所々に控えたり。

獅子王については頼政の太刀としては有名ではあるものの、太刀そのものよりも刀を与えられるきつかけとなつた鶴退治伝説の方が有名で、源家重代と位置付けられることはほとんど見受けられない。さらには源家の人物から信頼されず強い非難を受けた者が佩刀した刀を、重代の太刀の名称として用いていることには違和感を懐かざるを得ない。

「獅子ノ子」は、「獅子王」を拝領した頼政、すなわち「二心ある」頼政を象徴していると読み解くことができないだろうか。

第三節 小烏の太刀

小烏は先述のとおり、為義が獅子ノ子の写しとして持えられた刀である。以下は『剣の巻』における小烏についての記述であり、流布本と百二十句本のいずれにも共通して書かれるが、流布本の方がより詳細に書かれているため、流布本の本文を載せる。

『平家物語』流布本「剣の巻」

播磨国より好き鍛冶を召し上せ、獅子の子を本にして、少しも違へず造らる。最上の剣なりければ、悦び給ふ事

限なし。目貫に烏を作り入れたれば、小烏とぞ名づけたる。為義は獅子の子小烏とて、一具して秘蔵しけるが、今の小烏二分ばかり長かりけり。或時二の剣を抜きて、障子に寄せかけて置かれたりけるが、人もさはらぬに、からからと倒るる音聞えければ、如何に剣こそ転びぬれ、損じやしつらんとて、取寄せて見給へば、日来は二分許長しと思ひつる小烏が、獅子の子と同じ様にぞなりにける。不思議かな、さるべきやうやある、斬れたるか、折たるかとして先を見れども、斬れも折れもせざりけり。怪みて柄を見るに、目貫折れてなかりけり。抜きて是を見れば、柄の中二分ばかり新しく切りて、目貫を突抜きて、さがりたりと見えたり。

とあるように、『劍の巻』では不思議にも小烏の目貫が折れ、そして茎が欠けたことになっている。

そもそも、小烏の太刀とは『平家物語』や後代の刀剣伝書において、平家の嫡流に伝わる宝刀とされる。本文中に「正和五年」（一一三六）の記述を持ち、現存する刀剣伝書の中で最古とされる『観智院本銘尽』では、

天國 平家ちう代のかからすといふ太刀のつくりなり

とあり、また、『平家物語』においても、小烏が平家の嫡流に伝えられたさまが書かれている。

『平家物語』 覚一本 卷第十「維盛出家」

（前略）抑唐皮といふ鎧、小烏といふ太刀は平將軍貞盛より当家につたへて、維盛までは嫡々九代にあひあたる。若し不思議にて世もたちなほらば、六代にたぶべし」と申せ」と（後略）

「二心ある」源頼政を象徴する「獅子ノ子」が小烏の茎を切る、つまり平家重代の太刀に傷をつけることを連想させる描写は、その後展開する源平の戦いにおいての源氏の勝利と、平家の滅亡までをも示唆していると考えられる。屋代本ではあえて「小烏といふ太刀とをば、都にのぼせ平家の見参に入れてけり」と、のちに平家の刀となった成行きを書き込んでいることも、この考察の裏付けとなし得るだろう。

再び目貫の破損という不思議に戻ると、単に平家重代の太刀と同名の刀に傷を負わずに平家失墜に結び付くにとどまらない寓意が見えてくる。仲間内の刀を切ったという「友切」の呼称へと変わる展開とするためには、目貫が破損し抜き出た刀身の茎を切るという過程にしくなくとも、刃こぼれのように

な刀身の損傷の方が自然な流れではないだろうか。ではなぜ、目貫を折る表現が用いられたのか。目貫とは元来、刀身と柄を固定させる金具であり、鎌倉時代の兵庫鎖太刀や黒漆塗太刀、そして後代の革や糸の巻太刀の頃には、次第に華美化し装飾の役目を兼ねるものとなっていた。¹⁵ 目貫は柄の中央に位置するため、特に目立つ金具部品でもある。装飾品を兼ねた華やかな目貫が破壊されるということから、奢り高ぶっていた平家の栄華が崩壊する様を連想できないだろうか。また、刀は目貫が折れた状態では刀身が安定せず抜けてしまうため、戦うことができなくなる。したがってこのような機能性の喪失から鑑みても、小烏の太刀が欠ける場面は刀を伝える家の滅亡をつぶさに暗示していると考えられよう。¹⁶

第四節 友切

友切については、特に逸話や名称に共通性が見られる実在の刀は管見の限りでは見当たらない。実在の名刀の名称に着想を得て友切と号されたのではなく、第一章で示した八幡神の夢のお告げに加え、『剣の巻』本文で保元の乱について書かれることから、友切の名称自体に、保元の乱という源氏間で

の肉親同士の内争を暗示しているように思える。¹⁷

さて、友切から髭切の名に戻された髭切の太刀はのちに源氏の棟梁である頼朝へと受け継がれる。しかし、結果として、もとの友切の名を想起するかのように、史実として河内源氏内部の対立として最大の悲劇ともいえる頼朝が義経を追討する結果となる。これは、中世期の文学作品で度々登場する「夢あわせ」の行為に基づいた結果であると思われる。「夢あわせ」は「夢とき」とも呼ばれ、人が見た夢について吉凶を占うことやその占う人を指し、夢あわせを生業とする者もいた。¹⁸ 未来の予兆を示す神仏からの夢告も同時期頃に成立した文学作品に共通する特徴であり、八幡神のお告げのとおり名前を戻したことで、源氏は見事勝利を収めることとなるのである。さらに、流布本『剣の巻』には、髭切のみが名称を戻されたあと、髭切の名に戻したおかげで所持者となった頼朝が勝利を収めたという記述があり、百二十句本『剣の巻』よりもいっそう髭切の威徳が強調されている。

ここで、本稿の主題である『剣の巻』から少々逸脱する内容となるが、源家相伝二刀譚。その後の髭切の行方を記す史料として、「北条貞時寄進状」について触れたい。「北条貞

時寄進状」は、相州文書所収の法華堂文書（写）である。これによると、頼朝が建久六年（一一九五）に上洛したとき、とある高貴な人物の病悩のお護りとして髻切を進呈し、その後、とある靈社に納められていたが、所在を探させていた安達泰盛の手に渡った。霜月騒動が起こると北条貞時が思いがけず見つけ出し拵え等を整え、源頼朝御願の寺とおぼしい法華堂に奉納するため、工藤時光によって弘安九年（一一八六）に赤地の錦の袋に入れられた髻切が御堂へと送られた、とある。寄進状の本文は以下のとおりである。¹⁶⁾

「北條貞時寄進状」○相州文書所収法華堂文書

御劍入状公朝狀

右大將家御劍号鬚剪、後御上洛之時、依或賣所御惱、為御護被進之、其後被籠或靈社之處、陸奥入道眞覚（安達泰盛）令尋取之云々、去年十一月合戦之後、不慮被尋出之間、於殿中被加裝束或作、為被籠法花堂御厨子、以工藤右衛門入道泉禪（工藤時光）、昨日被送入赤地錦袋、仍令隨進（安達泰盛）、奉籠御堂之狀如件、

弘安九年十二月五日（花押）（北條貞時花押影）

別当法印公朝

この寄進状によると、安達泰盛は「これを尋ね取らしむ」とあつて髻切を強く所望していたという。探し出させてまで髻切を求めていたというのであるから、源家重代の太刀を所持することで、得宗家の専制政治を改め自身の正当化を象徴しようとした泰盛という構図が読み取れようか。

関連して、室町時代中期成立の刀剣伝書の一つである『長享銘尽』²¹⁾において刀工「実次」作の刀として書かれる髻切についての説明を確認しておきたい。

『長享銘尽』

源氏重代のヒケ切ト云太刀作之、又彼作太刀城奥州禅門（安達泰盛）弘安九年十一月十七日合戦時尋出シ、相模守師時ノ卿・サイセウランシ殿（最勝團寺殿、北条貞時）法花堂ニ取レ畢、炎上ニ依テ焼畢其已後焼ナラス間、昔ヨリソリ高シト云（後略）

傍線部が「北条貞時寄進状」の記述と一致するため、この刀剣伝書は「北条貞時寄進状」の記述と共通の認識のもとに書かれたと考えられる。すると『劍の巻』においては法華堂奉納の記述は見られないことから、『劍の巻』は「北条貞時寄進状」成立より前、つまりは弘安九年（一一八六）までに

成立していたという解釈も浮上してこよう。

しかし、「北条貞時寄進状」を再度読み返してみると、文言が全体的に説明的であること、「或賣所」「或靈社」などと秘密にする必要が感じられないことをことさらばかして表記していること、「御堂に籠め奉る」としながら「の状、件の如し」と結んでおり、別当法印公朝宛の書き下し様式となっており、寺院への施入寄進状の一般的様式を用いていないことなど、不審とすべきところが多い。むしろ、安達泰盛の乱を介した北条氏髭切所持説を述べる刀剣伝書成立以降に作成された偽文書ではないのか。いずれにしても、これは「劍の巻」の主題からははずれた、髭切に関するまた別の独立した伝承である。⁽²²⁾ただ、「劍の巻」が北条氏髭切関与説と無縁であることは、「劍の巻」成立が「長享銘尽」に遡る蓋然性の根拠となる。

第三章 膝丸について

第一節 膝丸の別称

膝丸の太刀は、髭切と比べると現実の歴史の世界では源家

重代の太刀と見受けられない徴証がいくつかある。まず一点目は、本稿第二章において述べた髭切同様の、膝丸の別称の有無である。第二章で述べたように、髭切の別称が今の代まで言い伝えられるような名刀と共通点が見られたのに対して、膝丸の別称については、図2の(5)土蜘蛛を退治したことにより付けられた「蜘蛛切」と、(7)熊野の山の色から付けられた「薄緑」に関し、同様の逸話や号を持つ名刀が、管見の及ぶ限り確認できない。唯一、吠丸は同称の「吠丸」という源義朝の太刀が「吾妻鏡」に登場するものの、名称のほかにとりわけ共通性を見出せない。「吾妻鏡」の記述は、以下のとおりである。

『吾妻鏡 第五』 文治元年十月⁽²³⁾

紛失の法皇御剣を大江公朝が発見して献上する

十九日 戊辰 法皇の御護りの御剣、去年紛失す。

去ぬる比、江判官公朝、これを求め得て献

上せしむと風聞するの間、今日二品(頼朝)

御書をもつて公朝に感じ仰せらると云々。

これ左典廐(義朝)の太刀をもつて献じた

てまつらるるところなり。吠丸と号す。鳩

塙を時くと云々。先考の御重宝、再び朝家の御護りに備はるの條、御眉目たるによつて、今この儀に及ぶと云々。

公顯・範頼ともに参著する

廿日 己巳

御堂供養の導師、本覚院僧止坊公顯下著す。

廿口の龍象を相具するところなり。参河守

範頼朝臣相伴ひ参著すと云々。かの朝臣、

今夜すなはち二品の御所に参じ、日來の事

を申す。去月廿七日、西海より入洛すと云々。

鎮西において、仙洞重宝の御劍鶴丸を尋ね

取り、今度進上しをはんぬ。これ平氏の党

類、寿永二年に城外の刻、清経朝臣、法住

寺殿より御劍二腰吠丸・鶴丸を取る。そ

の隨一なりと云々。(後略)

傍線部の記述から、吠丸は平清盛によって都落ちの際に法

住寺殿(院御所)から持ち出されたものであり、九州で発見

された「鶴丸」とともに献上されたことが読み取れる。装飾

として施されている鳩の蒔絵について、鳥類の中でもあえて

八トが描かれたのは、八幡神社と八トの関係性が絡んでいる

のだらうか⁽²⁴⁾。

ところで、『劔の巻』における吠丸という名称は夜通し蛇のような声で鳴いた逸話に起源しているが、なぜあらゆる生物のうち蛇の鳴き声とされたのかについて注目していきたい。吠丸と同時に呼称が改められた獅子ノ子(=髭切)について、先に第二章一節において獅子王の号をもとに成立したものと考察し、獅子の語から逸話と呼び名が生まれたと述べた。頼政が朝廷から獅子王の太刀を授かるきっかけとなった鶴の尾は蛇であったとされているので、その尾の蛇から導き出されたとも考えられる。

蛇にまつわる逸話が伝えられている刀として、獅子王同様に源平の武将が使用していた刀で吠丸と漢字一字違いの、「抜丸」という太刀が存在する。抜丸は『平治物語』において平忠盛が佩刀し、その刀で蛇を追い返した話が記されている。以下は、この伝説について触れている『平治物語』の本文である。

『平治物語 上』『待賢門の軍の事』⁽²⁵⁾

この抜丸と申すは、故刑部卿忠盛の太刀なり。六波羅池殿にて、忠盛、昼寝してありける程に、枕に立てたる太

刀二度抜けけると、夢のやうに聞きて、目を見開き、見たまへば、池より長き三丈ばかりありける大蛇浮かみ出で、忠盛を犯さんとす。この太刀の抜けけるを見て、蛇は池に入り、太刀は元のごとく鞘に入り、蛇また出づれば、太刀また抜けけり。蛇、その後、池に入りて、またも見えず。忠盛、「霊ある剣なり」とて、名を抜丸とぞ付けられける。清盛、嫡子なれば、「定めて譲り得ん」と思ひけるに、頼盛、当腹の愛子たるによつて、この太刀を譲り得たり。

傍線部より、抜丸は平家重代の太刀であることが分かる。第二章三節で述べた友切を写して作られた小鳥と同様、源家重代の太刀についての語りに、平家に伝えられていた刀が関与しているのである。しかし、先に述べたとおり、膝丸に発する刀剣の名称については右にみた吠丸を除いては連想できるような刀が存在せず、髭切に比して現在も名を残す実在する名刀との共通性は弱い。

元来、膝丸が源家重代の刀と見受けられない二点目の要素は、南北朝期の延文・応安年間（一三五六―一三七五）に成立したと推測される『異制庭訓往来』中の記述である。髭切

と膝丸の名称は『異制庭訓往来』において、武器の項目中に見ることが出来る。しかし、平家重代の刀としては小鳥、抜丸と続くのに対し、源氏の宝刀は髭切のみしか挙げられていないのである。では、膝丸はどの項目にあるのか。それは、源氏の八甲（27）とされる鎧の一つとしてであり、刀としては記述されていないのである。『剣の巻』が普及してから『異制庭訓往来』が成立したのだとしたら、源家重代の太刀に膝丸も加えられているのが自然だと思われるため、『剣の巻』の成立は『異制庭訓往来』の成立に遡らないものと考ええる。『剣の巻』によつて二振りが源氏の重宝として広まる以前では、当時の人々にとつて源家重代の太刀とは髭切を指し、膝丸は宝刀として認識されていなかったことを示しているのは、着目すべき点である。

そして三点目は、軍記物語に見られる薄緑の太刀の所有者である。薄緑とは図2の(7)で変えられた名称であり、源義経が直々に名を改めた太刀である。『剣の巻』によると、一度は婚姻の引き出物として出されて源氏の嫡流から離れていた吠丸が、木曾義仲を誅戮する際に義経のもとに渡つたのち、源平の戦いが終息した壇ノ浦の合戦まで義経が佩刀し戦つて

いたという。『剣の巻』（『平家物語』屋代本・百二十句本等）ではまるで義経を勝利に導いたのは薄緑の威徳のおかげによるものであるかのように書かれている。ところが、源平合戦に関する軍記物語においては、薄緑の名の太刀は、『平治物語』では源朝長、『源平盛衰記』では畠山重忠と、義経ではない別の源氏の武将が佩刀しているのである。これらの点から、源氏重代の太刀がもとは二振りだったのではなく髭切のみだった、とまでは断言できないとしても、膝丸という刀の名称自体は源氏八甲の鎧の名からとったものである可能性が高い。

第二節 『曾我物語』における薄緑と髭切との邂逅

『剣の巻』図2の⑦において、真名本『曾我物語』に通ずる曾我兄弟の仇討ちについて言及されている。建久四年（一九三）に曾我兄弟が仇討を決行するに先立って、箱根別当が弟の五郎に与えた刀が薄緑であった、とある。

『曾我物語』も『平家物語』と同様、真名本や仮名本などいくつかの諸本が現存しており、もともとは土俗信仰に結び付いて成立した物語（真名本系）が、誓をうつ旨御前や絵解

法師の語り物として広まり、京都にもたらされて物語（仮名本系）として南北朝期に完成した、とするのが現代の研究の到達点である。²⁸ 真名本系統の諸本で薄緑とも記されていないかた太刀が、遅れて成立したとされる仮名本系統（太山寺本）では「友切」と称され、曾我兄弟の弟である五郎時致に授けられる。この刀は仮名本系統でのみ、「友切」となる以前に、「てつか」（頼光）、「虫喰」、「毒蛇」（頼義）、「姫切」（義家）、「友切」（為義）という、「剣の巻」を想起させる名称の移り変わりが語られる。²⁹ このことは、仮名本系『曾我物語』が『剣の巻』の話を取り込んで成立した物語であることを示していると考えられ、つまりは『剣の巻』成立は、仮名本系『曾我物語』に先立つことを示す。

『剣の巻』においては髭切の別称であった「友切」という名のみを抽出し、もともとの『剣の巻』の膝丸から薄緑への変遷語りを上書きするかのよう書き換えられている理由は、『曾我物語』が一族内の争いに端を発した仇討ちを主題とする物語である点にあると考える。『剣の巻』の夢のお告げでは味方を滅ぼすに等しい名称と断罪された「友切」を、あえて仇討物語に用いることによって、曾我兄弟（十郎祐成・五

郎時致)が工藤祐経を討つという一族間の争いをよりいっそう印象付ける意図があったのだろう。

さらに、仮名本系『曾我物語』のクライマックスにおいて刀に号が付されているのは、友切だけにとどまらない。髭切の号も登場するのである。仮名本では、仇討ちを果たした五郎が敵を追って御屋形の中に入り、その騒動を聞きつけた頼朝が、髭切の太刀を佩刀して五郎と対面する場面が記されている。以下は、仮名本系『曾我物語』の要約である。³⁰⁾

五郎は祐経追討に当たり、箱根の別当から与えられた源氏重代の友切を装備して討ち入る。

仇討ちを果たすと、敵を追って入った御屋形の中で、五郎丸という童と対峙する。その際五郎は腰の刀を取ろうとしたが、仇討のさなかに落としてしまっており捕らえられ³¹⁾。

騒動を聞いた頼朝が、重代の太刀髭切を抜いて現れる。そして、捕縛された五郎と対面し、その後、頼朝による尋問という展開となる。

『吾妻鏡』によると、建久四年五月二十八日、工藤祐経を討ち取った直後、「五郎は御前を差して奔り参る」とあり、また、翌二十九日の頼朝御前における尋問において、「祖父

祐親法師誅さるゝの後、子孫沈淪」、また「工藤祐経は頼朝の『御寵物』である一方、祖父祐親入道は頼朝の『御気色』を蒙った(誅された)のであり、彼と云い此と云いその恨み無きに有らず、拜謁を遂げて自殺せんが為なり」(以上、一部意を取り読み下し)と五郎は頼朝に向って直々に、頼朝の御前に駆け参った理由を答えたという記事がある。³²⁾これによれば、頼朝を切りつけたのではないにしても、刀を帯びて頼朝に走り迫ったのは事実であったと思われる。しかし、『曾我物語』では、仇討ち直後に騒動を聞きつけて現れた頼朝が、腰刀を失ってしまったがゆえに捕縛された五郎と対面したとされているのであって、五郎が仇討ちの際に頼朝を襲撃したとはされていない。³³⁾『吾妻鏡』に材を取りながら、真名本にせよ仮名本にせよこの事実を『曾我物語』が述べないのは、仇討ちを果たした五郎が晒し首という形で夭折した惨憺たる事実の結末を、髭切・友切(＝薄緑)の二刀の邂逅たる大団円を以て慰撫するという物語構想の上では、鋭い棘となるからであろう。

第三節 薄緑の太刀が意味するもの

『劍の巻』中では、刀の威徳により良い結果となったという記述が複数見られる。例えば、前九年・後三年の役や源義親の四男為義が興福寺・延暦寺の強訴を平定したことは、髭切・膝丸の劍の威徳のおかげだとしている。そしてその後、獅子ノ子・吠丸へと名が変わり、友切と呼ばれるようになったことよって、保元の乱という肉親同士の争いが起きてしまったとしている。すなわち、名称が髭切に戻されるまでの源家にとって都合の悪かった運命を、相伝の刀が背負ったことになっていなのだ。したがって、刀の名称が戻されたことは、源家の未来が約束されるつまり源氏の勝利と繁栄を暗示しているのではないだろうか。

このように考察を進めていく上での留意すべき観点は、薄緑の太刀は友切とは異なり、当初の名である膝丸に戻された旨の記述がないまま物語が進められる点である。そして結果として、髭切は呼称が戻されたことにより、源氏の武士の中心で最終的な所持者となった頼朝こそが鎌倉幕府を築いて武士政権の始祖となった。対して、名称が戻されなかった薄緑は、義朝が見た夢のお告げの言葉どおりに読み取ると、刀の靈驗

は以前と変わらず弱まったままの状態を示す。加えて、膝丸の太刀は源氏の嫡流から離れたあとに義経へと渡る。その理由からか、義経は鎌倉幕府の主力を担うことなく頼朝との關係が悪化し、襲撃を受けることとなった。一度は源氏のもとを離れた刀の所有者となることも、最後は頼朝と対立する結果を示唆していると考えられないだろうか。結果論ではあるものの、このように『劍の巻』では源家の運否天賦を刀が背負う、つまり未来を暗示させる役割を担っていると思われる。

とはいえ、薄緑は『平治物語』では源朝長、『源平盛衰記』では畠山重忠と文献によってさまざまに佩刀した者が変わることから、薄緑ないし膝丸という名の太刀が義経佩刀の源氏の重宝という認識は、『劍の巻』が成立してから広まったのではないだろうか。『劍の巻』をもとに成立したと考えられる幸若舞の『劍讚嘆』が室町時代に流行したことなどから『劍の巻』が広まって、物語が一般に知れ渡るようになると同時に、髭切・膝丸の二振りが源氏重代の太刀として広まったのが事実だろう。かりに、『異制庭訓往来』成立前に『劍の巻』が広まっていたとすると、源氏重代の太刀の項目に髭切のみが書かれるという事実は説明がつかない。したがって

『劔の巻』の普及は『異庭訓往来（延文・応安年間（一三五六～一三七五））』の成立から遡らないと考えられる。³⁴

薄緑の太刀について刀剣伝書においては、現存する中で最も古とされる写本『観智院本銘尽』³⁵の中で、国宗作「九郎判官うすミとりお作」とある。つまりは、この銘尽の写本が書かれた応永三〇年（一四二三）には、薄緑の名の太刀が義経の所持した刀として周知していたことを示している。

第四章 中国名刀故事と髭切・膝丸

第一節 干将の鍛えた二口の劔

『劔の巻』の冒頭では、多田満仲が源氏繁栄の守護を願って二振りの太刀の作成を依頼する。この宝劔がなぜ一振りではなく二振りであったのか、については、黒田彰氏が「劔巻覚書 土蜘蛛草紙をめくって」³⁶で述べている。黒田氏によると、『劔の巻』での髭切・膝丸が源頼光の手元にあった際の妖退治話³⁷には、『今昔物語集』や『太平記』に書かれる眉間尺の話の要素が含まれている、という。黒田氏が主張する共通点は、以下のとおりである。

十四世紀前半頃の成立とみえる土蜘蛛草紙での化人と対峙する場面において、渡辺綱の言葉で眉間尺の復讐話に関連した言及がされていること

『劔の巻』の頼光による妖退治話の根底と思われる逸話が『太平記』中にあること

『太平記』の鬼切と土蜘蛛草紙の三尺の劔はどちらも劔先を欠くべく造形が施されたもので、頼光の刀であること

このような点から、黒田氏は『太平記』に見られる眉間尺の話に先立つものとして土蜘蛛草紙を挙げ、いずれも頼光の太刀は眉間尺の劔をモデルしていると述べる。眉間尺の復讐話とは、呉王闔閭が干将に劔を制作するように命じ、干将は妻の莫耶の髪の毛や爪を炉に投じて「干将」と「莫耶」の陰陽の二口の劔を鍛えた。しかし、国王にはその二口のうち「干将」のみを捧げたために、干将は国王に処刑される。干将の子の眉間尺が、のちに「干将」を手に入れその刀で、

処刑された父親の仇を討つ という説話である。その説話と関連して、「干将」と「莫耶」の二口は中国春秋時代の名劔として、『平家物語』のほか多くの文学作品において触れられている。黒田氏は、論文の最後を、

多田満仲は一振でなく、どうして二振の剣を作ったのであろう。それは祖型の眉間尺剣が、「雌雄ノ太刀」(太平記十三)、つまり干将莫邪^{メカ}の二剣であったためでないか。と締め括っている。

黒田氏が述べる共通点以外に、話の内容にも似ている要素

がある。それは、『剣の巻』において呼称が変わる重要なきつかけとなる、刀が鳴くという逸話である。図2にあるように、二振りはそれぞれ獅子・蛇の鳴き声を発したことで、鬼丸から獅子ノ子、蜘蛛切から吠丸へと名称が変わっている。本稿第二章第二節で述べたように、獅子王が与えられる契機となっ

【表1】『剣の巻』と干将莫邪の剣の物語の異同

刀制作の経緯	源氏の武運を願って、天下を守護する者に相応しい剣が求められたことから	『今昔物語集』第9巻第44 「震旦莫耶、造劍猷王被殺子眉間尺語」 国王の后が鉄の精霊(鉄の塊)を懐妊したこと	『太平記』 「眉間尺針鏡劍の事」 鉄の精霊のはたらきて楚王の后が鉄の玉を懐妊したこと
刀の名称	(当初)髭切・膝丸 途中で髭切は4度、膝丸は3度名称が変わる	明記せず(呼称:「夫妻」の剣)	明記せず(呼称:「雌雄の二剣」)
物語の要約	源家で相伝される中、一度は所在が離れてしまった二振り、最後は頼朝のもとで揃う(流布本)	国王は干将・莫耶夫婦に名剣を作るよう命じたが、干将は王を怒らせ処刑される 干将の子・眉間尺は「干将」の剣を手に入れ、旅人の手助けを借りながら国王に復讐する	『今昔物語集』と同じ 後日譚として、燕の荆軻が始皇帝を暗殺しようとした際に干将が使用されたことや、皇帝に剣を献呈するため輸送する中で二口が龍となり、川に沈んだと語られる
物語で語られること	源家重代の太刀がもたらす剣の威徳を示す物語	父の仇を取ろうと、国王に復讐する復讐話	『今昔物語集』と同じ

た鶴は、その鳴き声に起源して「鶴子鳥」「鶴鳥」の枕詞を生じ、これらは離別した人を恋慕う枕詞として用いられる。

「干将」と「莫耶」の二口は、一揃いで夫婦刀あるいは雌雄剣と称される。しかし、二口は一度別々の所在となつてしまい、その際に互いを求めて鳴いたという伝説が物語中に登場する。これは、まさに枕詞「鶴鳥の」に共通している。

しかしながら、二つの話の要素を比較してみると、刀を作成した経緯や、物語で語られている要点などはまったく異なる。表1をもとに、以下、共通点と異なる点をまとめた。

共通点

・ 雌雄の剣とあるように、登場する刀が二振一具の関係を保持する

・ 刀が音を立てる（鳴く）という逸話がある。

異なる点

・ 刀を鍛えた期間が大きく異なる 剣の巻 六十日間／

「干将莫耶」の剣の物語 三年間

・ 物語全体を通してのテーマが異なる 剣の巻 剣の威

徳による源家の繁栄／「干将莫耶」の剣の物語 父親を

殺された息子の復讐話

ここで、刀が音を立てる（鳴く）という一応の共通点につ

いて深く考えていきたい。「干将莫耶」の剣の物語中の刀が鳴く逸話は、離れてしまった二口が別離を嘆きあつて鳴く、つまりは「鳴く」よりも「泣く」という意味合いである。二

口が夫婦剣（雌雄剣）と呼ばれるための要素をなしている。対して、「剣の巻」での「獅子ノ子」「吠丸」二振りは嘆いて

鳴くのではなく、寧ろ鳴き声が獅子と蛇という点から、雄々しいという表現が当てはまる。「獅子ノ子」と「吠丸」は、

獅子・蛇・鳴き声に共通点を見出し難く、第二章で述べたように両者共に怨霊鶴からの連想と考えるのが妥当である。

また、「鳴く」と「吠る」では二ユアンスが異なる。

多田満仲が天下の守護となる源氏の武運を司る刀を二振り鍛えたとしている点は、干将が鍛えた二口の剣由来かもしれないが、眉間尺が「干将」の刀を得て復讐を果たすという物

語の展開は「剣の巻」に影響を及ぼしていない。「干将莫耶」の剣の物語の構成は、前半が宝剣ができるまでの経緯、後半

が復讐話となっている。「太平記」に見られる「干将莫耶」の剣の話においては、切り落とした頭の口から刀の破片が飛

んでこないかが重要視されていることから、あくまで「干

「将莫耶」の剣の物語全体を通しては、殺した相手に対する復讐話こそが主題といえるだろう。

さらに、「干将莫耶」の剣の物語には、二口の剣の威徳で世を治めたという記述は見られず、むしろ魯からの使者が「莫耶」に刃こぼれがあるのを見て、呉の滅亡を予測したとい⁸⁸⁾う。

「干将」と「莫耶」の剣が名剣とされていたとしても、源家が天下の守護を担うまでの経緯を重代の太刀が物語る『剣の巻』において、国の滅亡を予言させるような剣をモデルとしたとするのは、いささか落ち着かぬ感が否めない。『剣の巻』の物語構想のモデルとなった剣は何であるかについては、黒田氏の説から離れて次節であらためて考察する。

ところで、前述の異なる点に挙げた、二つの物語の作刀に要する期間に注目したい。「干将莫耶」の剣の物語では三年間もかかっているのに対し、『剣の巻』では、刀鍛冶が二振りを鍛えるのに要した日数は六十日⁴⁰⁾である。『延喜式』巻四十九の兵庫寮の項目によると、烏装の横刀を一振り鍛えるのに、名匠では二十一日かかるとい⁴¹⁾う。当然、日本刀と古代の中国剣では工程や作刀期間に違いはあるだろう。しかし、

『剣の巻』の方は、物語といえども二振り分の作刀日数が非常にリアリティのあることが分かる。八幡神による夢のお告げや妖怪退治の逸話など幻想的な要素が多い中で、このような現実的な日数が用いられている点も、大衆に刀の興味・認識が広まった南北朝以降に『剣の巻』が成立したという渡瀬(二〇〇二)の論点に相通ずる。

第二節 漢の高祖の三尺の剣

本稿冒頭において、平家物語の諸本のうち屋代本や読み本系統に属す『源平盛衰記』や『太平記』には版本の付録として『剣の巻』が残り、そのためか、物語の本文途中に組み込まれる百二十句本と比較するとより詳細に書かれている、と述べた。そこで、詳しく記述される付録型の『剣の巻』を見ると、最上の剣を二振り鍛えたのち、「彼の漢の高祖の三尺の剣ともいひつべし」という比喩が用いられている。漢の高祖の三尺の剣とは、『史記』「高祖本紀」において、前漢の時代の高祖(＝劉邦)が所持した剣のことである。『史記』では、劉邦が死去する直前に

吾、布衣を以て、三尺の剣をもちて天下を取れり。此れ

天命に非ずや

と言いつ残しており、酒井利信氏は、刀剣に対する神秘的な觀念が政治や精神世界に入り込んできたが、中国における刀剣觀の原点にこの高祖の三尺の劍がある、と述べている。⁴²⁾

この劍は『平家物語』本文や『曾我物語』にも登場し、中でも『和漢朗詠集』に収められる次の詩が有名である。

漢高三尺之劍 坐制諸侯

張良一卷之書 立登師傳⁴³⁾

西田禎元氏は、この詩について次のような見解を述べている。

『後漢書』所載の詩文ということらしいが、『史記』の「高祖本紀」や「留侯世家」の故事をふまえた、わが國漢詩人の詩文であろうと思われる。「三尺之劍」は本紀の「持三尺劍取天下」により、「一卷之書」は世家の「出一編書曰、讀此則為王者師」によつてものと解される。ともあれ、この説話には、見事な兵法で敵軍の総大将項羽を打破つた張良と、その彼を名參謀と賞

賛してやまなかつた高祖との、君臣一体の様子が記されており、教訓はまさに、「思慮（謀）を専にすべし」ということになろう。⁴⁴⁾

西田氏は傍線部にあるように、劉邦と張良は、國の統治者と巧みな作戦で支えた軍師という關係であつたという。そしてこの關係性は、あたかも源頼朝・義経の關係を連想させる。⁴⁵⁾「劍の卷」において、「異朝より鉄の細工」が制作したという「髭切」「膝丸」は「干将」と「莫耶」の劍ではなく、この三尺の劍に想を得たのであり、源氏が勝利して鎌倉幕府を築きあげた功績には、劍の威徳と頼朝・義経の君臣一体の關係があつてこそのものでつたということを示唆していると読み解くべきであろう。⁴⁶⁾

第三節 名刀小狐作刀の逸話

詳細な内容を有する付録型の「劍の卷」について論ずるうえで、もう一つ注目したい場面がある。それは、異國から渡つた刀工が髭切・膝丸を鍛えるまでの経緯である。百二十句本では、筑前国から呼ばれたあと刀工はすぐに八幡社の本社である宇佐八幡宮に籠つて八幡神に源氏の武運を願う。そして

祈った後はまたすぐに社を出て都へ上り、二振りの制作を始めるといった、シンプルな構造をとっている。しかし、付録型の『劍の巻』では、満仲が最初は別の刀工を呼んで刀を作らせるも良いものはできず、次に百二十句本と同じく異国の刀工を筑前国から呼び寄せて何度も作らせるが、やはり良いものがない。そこで、異国の刀工は悩んだ末に八幡宮に籠って八幡神に祈り続けたところ、夜な夜な八幡神が現れて六十日で作刀するようにお告げを受けたことで、髭切・膝丸が制作されることとなる。『劍の巻』の付録型・本誌型いずれの形式の諸本に、ともにある義朝が見た夢の場面のほか、付録型においてはここでも八幡神のお告げが登場するのである。

ここで、刀の制作を命じられるもなかなか良い刀を作ることができずに悩んだ末、神のお告げを受けることで、素晴らしい刀を鍛えられたという展開は、当時実在した名刀にまつわる伝説が影響していると考えられる。それは、平安時代の刀工・三条宗近が鍛えたと言いつた小狐である。小狐は、能「小鍛冶」で次のような伝説が残る。

夢のお告げを受けた一条天皇が、三条宗近に宝剣を打つ

ように命じる。

しかし、相槌を打つ相手がいないことを悩んだ末、稻荷明神に参詣して祈る。

すると童子が現れて、勅命が下っている現状と、古今東西の劍の威徳を示す伝説を語る。

刀を共に打つと言って消えた童子の正体は稻荷明神の使であり、その後狐の姿で現れた使いととも刀を鍛える。作り上げた剣を勅使に献上して、稻荷山へと帰る。⁽¹⁸⁾

傍線部の古今東西の劍の伝説を語る場面では、先述のとおり高祖の三尺の劍も語られている。そして、刀を作れずに悩む点や神に祈る展開、そして結果的に宝剣を鍛えるという結末には、『劍の巻』の異国から渡った刀工との共通性を見出すことができる。この小狐の太刀は、本文に正和五年（一一一六）の記述がある『観智院本銘尽』に、

宗近 三条のこかちといふ、後とはのあんの御つるきう
きまるといふ太刀を作、少納言入道しんせいのこきつね
おなし作也⁽¹⁸⁾

と書かれることから、すでに鎌倉時代末期には刀の存在が知られていたと判明する。髭切・膝丸の二刀を制作する過程の

叙述にも、小狐という当時の名刀をめぐる伝説が意識されていたのは明らかだろう。⁽¹⁸⁾

おわりに

『平家物語』における節刀所在の変遷によせて

『平家物語』「物怪之沙汰」の章段では、節刀の所在が敵島神社から八幡社、そして春日大社へと移り変わる様子が書かれる。節刀とは、朝敵征討のため出発する将軍に、しるしとして天皇から与えられる刀のことである。それぞれの神社が平家、源家、藤原氏の氏神であることから、節刀が移る経緯が、平氏、源氏、そして源実朝の死後藤原将軍が台頭することを暗示しているのが通説である。⁽¹⁹⁾

『劔の巻』では、最後は頼朝のもとに髭切・膝丸の二振りが揃ったところで話が終わる。⁽²⁰⁾ そのため、先の節刀の役割と同様に、頼朝が幕府を築き武士を統制する世を暗示しているのではないだろうか。あるいは、『平家物語』では、壇ノ浦の戦いにて草薙劔が失われたことと合わせて、平家が滅亡する結末となった展開からすると、紛失してしまった草薙劔の

代わりとなる力を持つのが「髭切」「膝丸」の二振りであると示しているとみることができよう。物語の舞台の後の世は、貴族中心の時代が終わって頼朝が幕府を開き武士を統制する時代となる。つまり、結果として武家つまり源氏の天下守護が果たされたのである。すると、平家の盛衰と源家の興隆をより印象づけるという動機に基づいて、本編の内容・時系列から独立した 劔の威徳がもたらす物語 が生まれたのだと解することができる。

本文の形式等から『劔の巻』が成立したのは、鎌倉時代のうちの南北朝期以降であるというのが現在の研究の到達点であるのは前に述べたとおりである。⁽²¹⁾ ここで、『劔の巻』の成立時期について、これまで述べてきた史料考察をまとめ、右の通説に関しさらに詳細に推察を加えたい。

(1) 『異制庭訓往来』の源氏重代の太刀に膝丸が記されていないことから『異制庭訓往来』の成立(一三五六年、一三七五年)よりあとと考えられる。

(2) 仮名本系『曾我物語』の中に『劔の巻』を明らかに想起させる名称の移り変わりが記されることから仮名本系『曾我物語』成立に先行すると考えられる。

(3) 刀剣伝書の記述を見ると、『観智院本銘尽』写本において薄緑という名の太刀は義経が所持していたと書かれていることから、同写本成立の応永三〇年(一四三三)には『劍の巻』が完成されていたと考えられる。

室町時代には、刀剣、とりわけ、しばしば宝剣の扱いをされた太刀が將軍家や権力者のもとにあることが重要視された。刀剣書の普及と合わせて、⁽⁵³⁾ こうした時代の様相が、劍の所在が権力の移り変わりを示す物語を成立させた所以といえよう。あるいは、友切へと名前が変わってからの義朝の劣勢が続いた時代を、劍の靈験が弱まっていたのが原因だと説いているところには、御靈信仰の影響を見出すことも可能である。

『劍の巻』において逸話を重ねることに変わっていった二振りの名称は、当時名刀と評価されていた有名な刀の号や、伝説として『劍の巻』成立当時今なお語り継がれる逸話からとったものであるという考察に至った。しかし二振りの数々の名称の起源になったと推察される刀を紐解いてみると、平家重代の刀であったり、あるいはその所持者が源氏の人物から強く非難を受けていたり、源家重代の太刀らしからぬ点

がいくつも見受けられた。これは、義朝の夢のお告げについて、本稿第一章で述べた 論点一 すなわち、刀の名称の変遷語り自体が、源家不吉の時代の所以を説き明かす物語を構成しているのではないかと導く。

また、二振りのモデルと推測できる当時の名刀が背負う逸話には、中国の名剣とその逸話もふまえられていることを明らかにした。『劍の巻』では、二振りが別々の所在に至るまでは妖怪退治や刀が動物の声で鳴くという不可思議な現象についての話が続く。生物の中で獅子と蛇が充てられた由来も、二章・三章で述べたように、名刀やその逸話に起源している。では、なぜ名前を変更するほどに、ファンタジックな伝説が刀に重ねられていったのだろうか。そもそも、そうした逸話が刀とともに伝わったのは、髭切と膝丸のみではない。もともと太刀が怪異を断ち切るための道具であったことの名残であるうか、同時期(物語中では鎌倉初期以降)の刀には、こうした何かを斬り、あるいは鬼や妖怪等と対峙、あるいは退治した伝説に由来する号を付けられることが多い。⁽⁵⁴⁾

刀と妖怪との関連性は、戦闘に従事する武士にとって、人々が畏怖するこの世ならざる存在をも臆せず制圧する武人とし

ての屈強さが、刀に結晶したことに求められよう。つまり、刀に逸話を語らせることによって、切れ味・強靱などの尋常ならざる刀自体の付加価値を称揚すると同時に、それを所持する者の威厳をも示そうとした、と考えられる。「劍の巻」ではさらに、個々の力、個別の所持者を越えて、作刀当初の願いとして「源氏の守護たるべし」と記された目的を果たすかの如く、源家一統の威光を示すことが意図されたのだろう。「劍の巻」源家相伝二刀譚は、人や獣ならざるものまでも制圧する重代の太刀二振りが示す源氏の武運を主題とし、当時の有名な名刀にまつわる逸話、日本の夢解きの予見性や中国の故事、あるいは謡曲など、様々な要素が織り込まれた物語である。様々な要素が織りなす、その詰まるころには、三尺の劍に語られる劉邦と張良の関係のように、一度は敗北した源氏が再興して世を治めることができたのは頼朝と義経の連携があつたからこそである、というのが、「劍の巻」が最も伝えなかったメッセージなのだと考える。そしてその二人の威光を称えるために、各々が佩刀して戦いに赴くに至るまでの、二振りの刀が担った武運盛衰のメタファーとして大きな物語が生まれたと結論する。

注

- (1) 松尾葦江「諸本論とのつきあい方 平家物語研究をひらく」『中世文学』二〇一五年六十巻、五〇頁～六一頁 参照。
- (2) 高木信「平家物語」「劍巻」のカタリ 正統性の神話が崩壊するとき」『日本文学』一九九二年四一巻一二号、一頁～一三頁 参照。高木氏は、論文中で（生形一九八三）を引用し、生方氏のいう「失われた宝剣に代わり、頼朝が朝家の固めとして現われたと語る」構想を認める。
- (3) 水原一校注『新潮日本古典集成 平家物語下』新潮社、二〇一六年、二七四頁～二八八頁 参照。国会図書館蔵の百二十句本を底本としている。
- (4) 渡瀬淳子「劍巻の成立背景 熱田系神話の再検討と刀剣伝書の世界」『国文学研究』二〇〇二年一三八号、一二頁～二二頁 参照。
なお、南北朝期に成立した刀剣伝書の例として、『観智院本銘尽』は一四三三年の奥書（書写）、『鍛冶名字考』は一四五年の奥書、『長享銘尽』は一四八八年の奥書がある。
- (5) 永井一孝校訂『平家物語』友朋堂書店、一九一〇年。底本は、流布本万治二年（一六五九）刊片仮名交り版本。原本に『劍の巻』は付属していないものの、多くの流布本には、『劍の巻』が付くことから、『太平記』『源平盛衰記』などの版本に付属する内容と同様のものが巻頭に加えられている。冒頭に刀剣礼賛の序が書かれる点が、百二十句本の形態とは異なる。

- (6) 前注(3)に同じ。
- (7) 名によってその性格を的確に表すとの意。
- (8) 渡瀬氏は、髭切の改名である「鬼丸」は粟田口国綱作の「鬼丸国綱」、そして獅子ノ子(髭切)を写してつくられた「小鳥」は平家重代の太刀で同名の「小鳥」を指すのであり、この小鳥は既に南北朝期の刀剣伝書において名刀の扱いを受けていたと述べている(渡瀬二〇〇二)。なお、「鬼丸国綱」は、現在は御物として皇室で管理されている。また「髭切」と言い伝えられて現存する刀は、北野天満宮(京都)「鬼切丸 別名髭切 伝安綱 や、御劔八幡宮蔵(愛知) 髭切丸(朋切丸) などが挙げられる。「膝丸」と言い伝えられて現存する刀は、大覚寺(京都) 太刀 銘 忠(薄緑) や、箱根神社(神奈川) 太刀・薄緑丸 などが挙げられる。
- (9) 長谷川端校注・訳『新編日本古典文学全集 太平記』小学館、一九九八年。
- (10) 市古貞次校注・訳『新編日本古典文学全集 平家物語』小学館、二〇〇七年。
なお「獅子王」は現在、東京都の東京国立博物館に所蔵されている。
- (11) 鈴木一雄、外山映次、伊藤博、小池清治編『全訳読解古語辞典』三省堂、二〇一四年 参照。
- (12) 柳瀬喜代志、矢代和夫、松林靖明、信太周、犬井善壽校注・訳『新編日本古典文学全集 将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』小学館、二〇〇八年。
- (13) 前注(12)に同じ。
- (14) 「小鳥」は現在、「小鳥丸」の号で御物として皇室で管理されている。
- (15) 加島進「目貫」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第一三巻』吉川弘文館、一九九二年 参照。
- (16) 刀身が抜けて戦闘ができなくなる場面は、寛一本「平家物語 巻第四「橋合戦」の章段にて浄妙明秀の身に起きたこととして書かれる。以下、その記述。
やにはに八人きりふせ、九人にあたるかたきが甲の鉢に、あまりにつよううちあてて、目貫のもとよりちやうと折れ、くつとぬけて、河へざぶと入りにけり。前注(10)に同じ。
- (17) 太刀が友切と呼ばれるようになったあとは、保元の乱についての話が続く。保元の乱では、源氏の棟梁の為義と義朝の親子が敵対した。『剣の巻』には、源義朝が為義の処刑を承った記述もあることから、友切の呼び名が原因で同胞同士の間が起きたと暗示していると思われる。
- (18) 菅原昭英「夢」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第一四巻』吉川弘文館、一九九三年 参照。
- (19) 竹内理三編『鎌倉遺文 古文書編第二二巻』東京堂出版、一九八一年 引用。小字括弧書きは私注。
- (20) 「入道真覚」とあるが、安達泰盛の出家後の法名が「覚真」であること、陸奥守であったことから、安達泰盛を指すと思われる。

- (21) 旧安田蔵本の写本。本文に「今の長享二年(一四八八)迄」という記述がある。
- (22) 愛知県西尾市の御劔八幡宮の縁起について記された「御劔八幡宮鎮座記」(財団法人文化財建造物保存技術協会編『西尾市指定有形文化財 御劔八幡宮本殿他二棟修理工事報告書』御劔八幡宮修理委員会、一九九一年所収)および「西尾城由来書 幡豆郡西丘城由来書」(『西尾市岩瀬文庫叢書三 鶴城記・西尾城由来書』西尾市岩瀬文庫(西尾市教育委員会)、二〇〇一年所収)も髭切の所在を記す独立した伝承である。これらによると、御劔八幡宮は、承久年中(一一一九)―一二二二)に三河国守護足利義氏が西条城(のちの西尾城)を築城する際、城内鎮護の神として松山から本丸内へと移転されるときに、髭切丸(朋切丸)と源氏の旗である白旗一流が納められたという。この縁起の中では、鎌倉の御家人である足利義氏が北条政子から直々に源氏嫡流相伝の神器として授けられたとも記されている。
- (23) 永原慶二監修、貴志正造記注『新版全譯吾妻鏡第一巻』新人物往来社、二〇一一年 引用。なお、引用文2行目「去年紛失す」について、吉川子爵家所蔵本では「去々年」と記されている、とある。二十日条では、同剣を平氏が寿永二年(一一八三)に都落ちしたときに法住寺殿から奪い取ったとあるため、文治元年時点からすれば、「去々年」でなくては辻褄が合わないが、本稿では本文をそのまま載せた。
- (24) 池田浩貴『吾妻鏡』における八幡神使としての鳩への意味付け」『常民文化』二〇一六年三九号、一四六頁―一二九頁 参照。
- (25) 『平家物語』「ぬえ」(前注(10)本文)によれば「尾は蛇」とある。
- (26) 前注(12)に同じ。
- (27) 清和源氏の宗家に重代として伝わる八領の鎧のこと。膝丸はその一種で、千頭の牛の膝の皮で作られたという。同名の鎧が『保元物語』や『平治物語』に登場する。
- (28) 山下宏明『曾我物語』国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第八巻』吉川弘文館、一九八七年 参照。
- (29) 鈴木彰『源家重代の太刀と曾我兄弟・源頼朝』『曾我物語』のなかの「髭切」「友切」「武久堅監修・中世軍記の展望台』和泉書院、二〇〇六年 参照。
- (30) 梶原正昭、大津雄一、野中哲照校注・訳『新編日本古典文学全集 曾我物語』小学館、二〇〇六年 参照。
- (31) 五郎丸が五郎をとらえたとする点は、『吾妻鏡』において小舎人五郎丸が五郎を搦め取ったとあり、細部に至るまで一致するため、『吾妻鏡』に材を取っていることは明らかである。当該記事を収める『吾妻鏡』前半部分の成立は十三世紀半以降成立とされることから、『曾我物語』真名本系の完成はそれ以降であると読み取れる。
- (32) 黒板勝美、国史大系編集会編『新訂増補国史大系 吾妻鏡 第二』吉川弘文館、一九七二年 参照。なお、この記述によると、五郎は祖父祐親が頼朝の「御気色」に沿って誅され

いう認識であるが、『吾妻鏡』寿永二年（一一八三）二月十四日条（同前『吾妻鏡第一』）によると、祐親は頼朝の恩赦が伝えられたにもかかわらず、恥じて自殺したと記されている。

(33) 五郎の頼朝御前襲撃については、『剣の巻』でも触れられていない。

(34) 髭切の太刀は、ほかの軍記物語や歴史書にも見られる。まず、『平治物語』中巻「頼朝生捕らるる事」において、平治の乱後、頼朝が平宗清に生け捕りされる前に「髭切といふ重代の太刀の丸鞘なるを萱にて包み」と、髭切を所有していた様子が記されている。また、金刀本では同場面についての付記があり、ここでは、生け捕りされたあと平清盛に髭切の在り処を聞かれた頼朝が源氏の重宝を平家に渡すことに残念がり、嘘をついて別の重代の太刀を差し出す様子が記されている。

南北朝期成立の歴史書『保暦間記』には、以下のように髭切をめぐる詳細が記されている。頼朝は尾張国で捕えられた際、髭切のある御堂の天井裏に隠しておいたが、太政入道平清盛が取得し所持していた。その後清盛は、京都八条に宿所を造営し、後白河法皇が訪れた際、所有していた様々な珍宝を紹介した。その中で髭切を見つけた法皇は髭切を所望し、清盛は平家の重代であると伝えながらも喜んで献上した。建久元年（一一九〇）、頼朝は関東へ下向する前に後白河法皇院に立ち寄ったとき、法皇は朝廷の敵対勢力を滅ぼした功績

の褒美を与えようとした。その時、袋に入れられた髭切を頼朝へ渡し、頼朝は、平家の手に渡ってから三十年余り経って再び自分の手に髭切が戻ってきた巡り合せに感動して涙を流した。

対して、義経が薄緑を佩刀した記述は、『平治物語』と『保暦間記』のいずれも無い。成立年代から考えても、やはり義経と薄緑（＝膝丸）の太刀の結びつきが生まれたのは、『剣の巻』成立以後と思われる。

(35) 応永三〇年（一四三三）の奥書がある写本。内容は正和五年（一一三六）のもの。

(36) 黒田彰「剣巻覚書 土蜘蛛草紙をめぐって」長谷川端編『太平記とその周辺』新典社、一九九四年。

(37) 源頼光の従者渡辺源四郎綱が鬼を斬ったことで呼び方が鬼丸へと変わった話と、源頼光が土蜘蛛を斬り蜘蛛切へと呼名が変わる話を指す。黒田氏は、二つの物語をそれぞれ髭切・膝丸の後身であることから鬼丸譚・蜘蛛切譚と名付けている。

(38) 劉玉才訳注、倪其心審閲『中國名著選譯叢書 吳越春秋』錦織出版、一九九二年 参照。魯の使者は莫耶の鐔が削片しているのを見て、「夫劍之成也、吳覇 有欠、則亡矣（後略）」と嘆く。

(39) 『捜神記』巻一における千将莫耶の剣の物語では、剣を作る期間が長すぎたために王が怒ったとされている。

(40) この作刀に要した日数は、百二十句本と流布本のいずれの系統にも共通している。

(41) 国立国会図書館デジタルコレクション 皇典講究所、全国神職会校訂『延喜式』校訂 下巻 大岡山書店、一九二九年 参照。

(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1442231/177> 閲覧日：二〇一〇年十二月十日)

『延喜式』巻四九 兵庫寮

烏装横刀一口。長功廿一日。中功廿五日。短功廿八日。

打坏一日。手力一人破兼合兼并打刃二日。别手力一人剪

并錯一日。鹿砥磨一日。焼并中磨一日。精磨一日。莹一

日。鐫鞘囊革一日。元漆三遍。每遍塗乾一日。中漆二遍。

每遍塗乾一日。作鉸具二日。鹿錯。精錯并焼塗漆二日。

搓線并纏柄中漆一日。柄鞘花漆一遍一日。著鉸具及柄一

日。

傍線部より、横刀すなわち太刀を一振り鍛えるのに、熟練者で二十一日は要したことが分かる。

(42) 酒井利信「古代中国における刀剣観に関する一考察 漢代以前の歴史書・小説を中心に」『倫理学』一九九八年一五号、一頁～二六頁 参照。

(43) 菅野禮行校注・訳『新編日本古典文学全集 和漢朗詠集』小学館、二〇〇八年。

高祖とその功臣張良を称えた文で、読み下し文は以下の通りである。

漢高三尺の劍 坐ながらにして諸侯を制す

張良一巻の書 立ちどころに師傳に登る

【訳】前漢の高祖は名も無い庶民から身を起し、三尺の劍をもつて、いながらにして諸侯を制して天下をとつた。また、前漢の張良は一老人から授けられた一巻の兵書を読んでたちまち帝王のために太子の守役となつてよく補佐した。

(44) 西田禎元『十訓抄』の中国故事 帝王にまつわる説話をめぐつて(中)、『創大アジア研究』一九九八年一九号、七頁～一四頁 引用。

(45) 『曾我物語』中に、髭切を手に取り現れた頼朝を見た大友能直が、「君は居ながら日本国を随へさせ給ひ候ふぞかし」と押し留める記述がある。この表現はまさに、第四章二節で述べた漢の高祖の三尺の劍の話が明らかに意識された記述であり、つまりは髭切を所持する頼朝を劉邦に重ねたという観点点が導かれよう。

(46) 黒田氏は、黒田(一九九四)で高祖の三尺の劍についても触れているが、『劍の巻』と劉邦・張良との関係性については述べていない。

(47) 石井倫子「小鍛冶の周辺」『日本女子大学紀要』文学部、二〇〇二年五二号、一頁～二二頁 参照。

(48) 国立国会図書館デジタルコレクション『銘伝』(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288371> 閲覧日：二〇一〇年二月十日)

本文中に「正和五年」(一一三六)の記述が見られる、鎌倉時代末期に成立した刀剣書である。東寺塔頭の一つの観智

院が旧蔵していたことから、観智院本銘尽と称される。

- (49) 石井氏は、神に祈って神の力を受けて剣を完成させたという展開が『剣の巻』と似ていると指摘している（石井二〇〇二）。本稿で意図する『剣の巻』の読み解きの観点からすれば、神への祈りのほかに、剣の威徳をもって天下を統治するという目的や三尺の剣を例示していることの共通性にこそ注目したい。なお「小狐」は現在、同名の太刀 小狐丸 が石上神宮（奈良）に伝わっている。
- (50) 市古貞次校注・訳『新編日本古典文学全集 平家物語』小学館、二〇〇七年、三六四頁「物怪之沙汰」本文注 参照。以下、参照元本文注より抜粋。

終りの夢物語で、春日大明神が、源氏の後には節刀を自分の孫にくださいといったのは、藤原將軍の時代を示すもので、『平家物語』の成立を論ずる際に引かれる。

- (51) これは百二十句本系統・流布本系統のいずれも共通する。
- (52) 前注（4）に同じ。渡瀬氏は、『剣の巻』が刀剣伝書に近い傾向にあることから、『剣の巻』の成立時期を南北朝以降と考えている。

(53) 前注（4）に同じ。

- (54) 鬼丸国綱 平家重代の太刀。小鬼を斬りつけた逸話から／童子切安綱 源家嫡流に伝わった太刀。呑呑童子を斬った逸話から。／石切太刀 源義朝の長子である義平が所持した太刀。岩石さえも切るといふ故事を持つことから。／小鳥 平家重代の宝刀。桓武天皇のもとに現れた伊勢神宮の

剣の使いである鳥から授けられたことから。など。

【史料出典一覧】（五十音順）

- ・市古貞次校注・訳『新編日本古典文学全集 平家物語』小学館、二〇〇七年
- ・梶原正昭、大津雄一、野中哲照校注・訳『新編日本古典文学全集 曾我物語』小学館、二〇〇六年
- ・黒板勝美、国史大系編集会編『新訂増補国史大系 吾妻鏡第一』吉川弘文館、一九七二年
- ・皇典講究所、全国神職会校訂『延喜式』校訂 下巻 大岡山書店、一九二九年、国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1442231/177>）
- ・菅野禮行校注・訳『新編日本古典文学全集 和漢朗詠集』小学館、二〇〇八年
- ・竹内理三編『鎌倉遺文 古文書編第二巻』東京堂出版、一九八一年
- ・永井一孝校訂『平家物語』友朋堂書店、一九一〇年
- ・永原慶二監修、貴志正造注・訳『新版全譯吾妻鏡第一巻』新人物往来社、二〇一一年
- ・長谷川端校注・訳『新編日本古典文学全集 太平記』小学館、一九九八年
- ・水原一校注『新潮日本古典集成 平家物語下』新潮社、二〇一六年、二七四頁、二八八頁
- ・柳瀬喜代志、矢代和夫、松林靖明、信太周、犬井善壽校注・訳

- 『新編日本古典文学全集 将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』小学館、二〇〇八年
- ・劉玉才注・訳、倪其心審閲『中國名著選譯叢書 吳越春秋』錦織出版、一九九二年
- ・『異制庭訓往来』新日本古典籍総合データベース (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100244993/viewer/33>)
- ・『保暦間記』二巻、小瀬道甫刊行。国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532209>)
- ・参照元は初めて古活字版で刊行された一巻本(慶長末刊)と二巻本のうちの第一巻で、刊行者は小瀬道甫(＝小瀬南庵)である。二巻本は内題の下に「小瀬道甫刊」とあり、一巻本の本文に小瀬が自身の評論を書き加えて増補刊行したもの。『保暦間記』の成立は南北朝時代の正平年間(一三四六～七〇)後半といわれるが、参照元は版式等から元和・寛永頃刊行と推定される。
- ・『銘刻』国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288371>)
- 【参考文献一覧】(五十音順)
 - ・池田浩貴『吾妻鏡』における八幡神使としての鳩への意味付け『常民文化』二〇一六年三九号、一四六頁～一二九頁
 - ・石井倫子『小鍛冶の周辺』日本女子大学紀要 文学部、二〇〇二年五二号、一頁～一二頁
 - ・内田康『剣巻』をどうとらえるか その歴史叙述方法への考察を中心に「千明守編『平家物語の多角的研究 屋代本を拠点として』ひつじ書房、二〇一一年
 - ・生形貴重『「平家物語」の構想試論 武員伝承と物語の構想・延慶本を中心にして』『日本文学』一九八三年三二巻二二頁、一頁～一二頁
 - ・加島進『目貫』国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第十三巻』吉川弘文館、一九九二年
 - ・黒田彰『剣巻覚書 土蜘蛛草紙をめくって』長谷川端編『太平記とその周辺』新典社、一九九四年
 - ・酒井利信『古代中国における刀剣観に関する一考察 漢代以前の歴史書・小説を中心に』『倫理学』一九九八年一五号、一頁～二六頁
 - ・財団法人文化財建造物保存技術協会編『西尾市指定有形文化財 御劔八幡宮本殿他二棟修理工事報告書』御劔八幡宮修理委員会、一九九一年
 - ・菅原昭英『夢』国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第十四巻』吉川弘文館、一九九三年
 - ・鈴木彰『源家重代の太刀と曾我兄弟・源頼朝』『曾我物語』のなかの「鬚切」「友切」―武久堅監修『中世軍記の展望』和泉書院、二〇〇六年
 - ・鈴木彰『源家重代の太刀「鬚切」説について…その多様性と軍記物語再生の様相』『日本文学』二〇〇三年五二巻七号、五四頁～六五頁
 - ・鈴木彰『曾我兄弟所持の太刀と『曾我物語』 仮名本の流布と

- 再生」関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓 第三集』和泉書院、二〇〇七年
- ・鈴木一雄、外山映次、伊藤博、小池清治編『全訳読解古語辞典』三省堂、二〇一四年
- ・高木信「『平家物語』「剣巻」のカタリ 正統性の神話が崩壊するとき」『日本文学』一九九二年四一巻一―二号、一頁―一三頁
- ・竹田晃訳『搜神記』平凡社、一九九二年
- ・西尾市岩瀬文庫『西尾市岩瀬文庫叢書三 鶴城記・西尾城由来書』同文庫（西尾市教育委員会）、二〇〇一年。
- ・西田禎元「『十訓抄』の中国故事 帝王にまつわる説話をめぐって（中）」『創大アジア研究』一九九八年一九号、七頁―十四頁
- ・松尾葦江「諸本論とのつきあい方 平家物語研究をひらく」『中世文学』二〇一五年六〇巻、五〇頁―六一頁
- ・山下宏明「曾我物語」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第八巻』吉川弘文館、一九八七年
- ・渡瀬淳子「剣巻の成立背景 熱田系神話の再検討と刀剣伝書の世界」『国文学研究』二〇〇二年一三八号、一二頁―二二頁